

# 東京バッハ合唱団 月報

[ 第 536 号 ] 2007 年 2 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.536  
February 2007

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## さあ、《マタイ受難曲》演奏へ向けて！

新年会で語られた団員の抱負をご紹介します

加藤 剛男

2007 年 1 月 13 日（土）新年最初の練習前に、新年会が開かれました。午前中に大村先生ご夫妻の千歳船橋のお宅をお訪ねし、近所のレストランで昼食会というプログラム。今年は団員 8 名がお宅を訪問しました。その内 6 名は、今春の《マタイ受難曲》演奏会から新たに加わられた方々です。新しい息吹とうねりを感じさせるひとときでした。

掘り炬燵を囲みながら、1 月 6、7 日に愛媛県の松山で行われた松山バッハ合唱団の初練習（東京バッハ合唱団から有志が参加）の様子、道後温泉のこと、高知の坂本龍馬記念館のこと等が、ご指導で行かれた大村先生、団員の康美洋子さんらから熱く語られました。2 日間で全曲を通され、松山の方々も「曲のつながりもわかり、大変よかった」という感想だったようです。東京の団員たちへのお世話も行きとどいており、参加された 11 名の皆さんも満足して帰ってこられたとのことでした。

お茶をいただきながら、今年もまた一人一人にお年賀の品が先生より手渡され、そのあと《マタイ》からコーラル 2 曲、第 25 番“み心はつねに成しとげらる”と第 44 番“み手にゆだねよ”を、さすががしい思いで‘歌い初め’しました。

その後レストランに歩いて移動し、直接来られた 6 名の方々と共に、バスの戸川武志さんの音頭で乾杯をして会は進められました。お客様として、NHK ディレクターの鈴木健次様が出席されました。鈴木様は、奥様がアルト団員（幸子さん）で、昨年 10 月放送の「ラジオ深夜便」で大村先生が“バッハ合唱団の 45 年”について語られた時の聞き手・司会役をされた方です。放送の録音テープを聞きました時に、この方は何と詳細に合唱団のことを調べられたのかと、敬服させられておりました。団員以上に大村先生のこと、合唱団のことを熟知していらっしゃる。また、インタビューのポイントも、まさにここが知りたいという点に触れられ、実に驚嘆いたしました。これからは、側面から合唱団を応援くださるとのことですが、ご一緒にバッハを歌えるようになったら、どんなにか嬉しいことでしょう。

団員の方々は、それぞれ入団されたきっかけ、動機などを中心に話をされました。バス・野本哲雄さんは、演奏会場で《マタイ》の団員募集チラシをご覧になり、一

生に一度は歌ってみたいかったと、入団したとのこと。バス・菅間五郎さんは、バスの片岡武彦さんとかつて同じ会社で、海外勤務も長く、片岡さんのお誘いで入団してこられました。

神学生のバス・柳元宏史さんは、ボンヘッファー研究会で大村先生と出合い、入団されました。2 月にはお子さんが生まれる予定とのこと。月報 1 月号からはさっそく「全部おすすめ 50 曲選!!」の連載を始めてくださり、カンタータ各曲の内容と聖書との関連など、自由なエッセーをお寄せくださるそうです。テノール・澤田望さんは、合唱団初期の頃に入団され、創立 20 周年の《マタイ》演奏にも参加されました。ご都合で後援会員としてつづけて来られましたが、《マタイ》再演の機会に復団されたとのことでした。

ソプラノ・橋本みどりさんも元団員ですが、やはり誘いを受けて歌うことになったとのこと。ご主人も協力的で、練習テープでの演奏の音が切れると、またスイッチを入れてくださるそうで、家中で《マタイ》に取り組んでおられるようです。アルト・康美洋子さんは、世田谷中央教会の礼拝奏楽者であるお嬢さんから「教会で練習をしている東京バッハ合唱団で歌ったら」とすすめられ、入団したとのこと。今回は、小学校 5 年生のお孫さんも児童合唱で歌われるので、二重の喜びのようです。今回は、親子で歌われる方々が 4 組、お孫さんと歌われる方々も 4 組いらっしゃいます。バッハを中心とする家庭、何とほほえましいことでしょうか。

アルト・三上裕子さんは、「10 年前に足の治療で入院した時に、大村先生がお見舞いに、ご自分で編まれたマフラーを贈ってくださった。そのお心は、本当に嬉しかった。退院翌年のドイツ旅行には、不自由な足を引きずりながらも参加させていただいた。今は、足も大分よくなって《マタイ》を歌えるのは、嬉しいことですよ」とおっしゃられました。

大村先生からは、「今回の演奏会は、現時点で、東京バッハ合唱団 102 名、松山バッハ合唱団 27 名、児童合唱団 34 名と 160 名を越える合唱団で演奏します。予想をはるかに越える人数となりました。これからは、身体に気を付けてください。“体力と気力”が勝負です。後援会員の方々からのお年賀状でも、《マタイ》演奏会を楽しみにし

ています、という言葉が多い。受難曲といっても、重苦しくなく、是非“楽しめる”演奏にしてゆきたい」と、新年の抱負が語られました。

先生は『礼拝と音楽』2007年 Winter 号の「受難曲とわたし」の特別寄稿欄で、「音楽の力」と題して《マタイ》についてお書きになっています。佐々木正利先生も「ペトロの否認」と題して寄稿しておられます。是非お読みいただきたいと思います。

皆さんのスピーチとフランス料理に充実感と満足感を覚えながら、あっという間の2時間を過ごしました。その後、新年最初の練習に、皆で語りあいながら向かったのです。(団員：バス)

## 松山バツハの“新春初練習”に参加

山下 広之

新春の1月6日(土)の朝12時20分、羽田空港をゆっくりと動き始めた松山行き ANA589 便 B-767-300 は、全長55メートル、280人乗りの巨体をゆっくりと雨雲の中へ持ち上げた。折から関東・東北地方は生憎の空模様で視界ゼロの雲の中を大きく揺れながら飛び上がり、ようやく太陽の輝く雲の上に出て日本列島を縦断し、1時間14分の飛行の後、小雨の松山空港に着陸した。大村先生の指導による、松山バツハ合唱団の初練習に参加させていただくための旅行の開始であった。空港には橋本眞行さんをはじめ松山バツハの方が3台の車を用意して、我々一行を、松山城の堀端に位置する東京第一ホテルへ案内して下さった。

練習はホテルから15分くらいのところにある日本キリスト教団松山教会で午後6時からの予定なので、その前に、大国主命も入ったという、神代の時代からの歴史がある道後温泉でゆっくりと湯に浸かり、四国名物のジャコ天入りのうどんて腹ごしらえをした後、練習場に向かった。

松山教会は、1350本のパイプのある美しいオルガンを備えた歴史ある教会である。40人以上の松山の方が出席して我々9人も加わり、大村先生による日本語歌詞での練習が行われた。松山バツハ合唱団は、東京バツハ合唱団の副指揮者でもある橋本眞行氏が1978年に創立した歴史ある合唱団であり、これまでに32回の定期演奏会を

開いている。おばあ様と一緒に9歳のお孫さんも参加しているというほほえましい、優れた合唱団で、ドイツ公演も数回行っ

ている。

18時から開始された練習第1夜は、第1曲から順番に、入念に21時過ぎまでたっぴりと行い、40番あたりまで進んだ。エネルギーを使い果たした後は、橋本氏ご夫妻で予約して下さった、ホテルのすぐ隣のフランス田舎料理の店「アミティエ」で美味しいワインと料理に舌鼓を打ち、橋本さん以下松山バツハの方も交えて夜遅くまで楽しんだ。

翌日第2日は13時半からの練習なので、午前中は松山城を見学した。今から505年前、関ヶ原の戦いが済んだ2年後に築城された名城である。また、文豪正岡子規の生家を保存する「子規庵」もある。練習はたっぷり3時間大村先生の指導でつづけられた後、更に1時間、橋本先生による指導もあり、17時半までみっちりであった。

練習後、近くの東映松山ホテルの宴会場に場所を移して、松山バツハ合唱団新年会、兼東京バツハ合唱団歓迎会として盛大に懇親会が開かれた。料理が次々と運ばれ、ビールを鱈腹味わいながらテーブル毎に歓談した。我々のテーブルでは演奏会場の杉並公会堂大ホールについて質問が出た。これは、1200人収容のシューボックスタイプの、斬新なクラシック音楽専門の会場で、音響は松山教会の音響設計と同じ有名な永田音響設計事務所が設計した指折りの良いホール。日本フィルが本拠としており、完成には3年の月日と85億円を掛けたが、建設費用も運営経費も民間企業がもち、33年後に杉並区の所有になるという新しい方式で建てたもの、と説明すると、東京で歌うことが大いに楽しみになった、という話になった(現時点で27名の方が参加予定と伺っている)。

練習後、近くの東映松山ホテルの宴会場に場所を移して、松山バツハ合唱団新年会、兼東京バツハ合唱団歓迎会として盛大に懇親会が開かれた。料理が次々と運ばれ、ビールを鱈腹味わいながらテーブル毎に歓談した。我々のテーブルでは演奏会場の杉並公会堂大ホールについて質問が出た。これは、1200人収容のシューボックスタイプの、斬新なクラシック音楽専門の会場で、音響は松山教会の音響設計と同じ有名な永田音響設計事務所が設計した指折りの良いホール。日本フィルが本拠としており、完成には3年の月日と85億円を掛けたが、建設費用も運営経費も民間企業がもち、33年後に杉並区の所有になるという新しい方式で建てたもの、と説明すると、東京で歌うことが大いに楽しみになった、という話になった(現時点で27名の方が参加予定と伺っている)。

終了後は、橋本氏ご夫妻がまた二次会の会場を設定して下さり、市内で一番の繁華街、大街道にある「デリシャス鳥賊や」で、東京ではとても食べられないような旨い鳥賊の刺身などに舌鼓を打った。

全ての行事を終わり、1月8日(月)は、高知に向かわれた大村先生ご夫妻とは松山で別れて、瀬戸内海を眺めながら列車の旅を行い、今治からは、瀬戸内海を横断する瀬戸内しまなみ街道を海を下に見ながら渡って3つ目の島、旧村上水軍の根拠地であった大三島(おおみしま)まで渡り、ここで1300年の昔からの歴史をもつ大山祇(おおやまつみ)神社を見学し、その武器館の貴重な宝物の見事さに息を呑んだ。また門前の「喜船」で食べた昼食の鯛めしの味とともに忘れ得ぬ思い出となった。

こうして最後に、高松空港から一気に東京へ飛んで充実の松山練習旅行を終えることができた。(団員：バス)

<写真 松山教会での練習風景：川戸龍夫氏提供>



## 児童合唱団員・M君の場合

大村 恵美子

菅谷恵理子さん（お父さんは東京バツハ合唱団員の加藤剛男さん）は、1982年の《マタイ受難曲》初演のとき、小学6年生で児童合唱に参加した。《マタイ》の再演が2007年にきまったが、長男の基樹君はまだ3歳。子どもができたなら、ぜひ自分のときのように、児童合唱に入れてもらいたいというのは、長年の夢でもあったが、3歳ではあまりにも小さい。

「練習だけにでも通わせていただけたら」と、家中で相談してみた。「3月21日の定期演奏会参加は無理ですが、3月3日の教会での小演奏会までは、まったく問題ありません。」大ホールでの演奏会では、どんな事態が起こるかかわからない。そういうとき「大人はあんな無理をさせて、どういう気だったのだ」と、誰でも思うだろう。しかし、世田谷中央教会（3月3日の会場）は、基樹君一家が通いなれている母教会である。何が起きて、高いステージ上ではなく、聴衆と同平面のフロアだから、すぐに引っ込めることができる。まわりの方々も事態になれている。そんな判断から、基樹君の参加はきまった。いま総勢34名のなかには、1名の3歳児のほか、5歳児3名、小1も5名がいる（全体で男子8名、女子26名、最年長は小学6年）。

初回の練習では、様々な音程が聞こえて、さて行く末は？と未知数の感があったが、指導の内山亜希先生のみごとな乗せ方に、子どもたちの大きな潜在能力が引き出されて、みるみる力強く、統一された楽声となってきた。光野孝子先生のパワフルな発声指導も効果に直結した。

3歳児では、どこまでゆけるか、これは実験である。みんなで整列・静止して、長時間やりとげるといふこの概念がまだなく、ひょいひょいと場所を移動する。どこをどうするのか、つかめないでしょんとする。疲れてくると抜けて出る。・・・端正な基樹君でさえ、こんな具合だ。でもそれが自然なことだ。

私はいちど、子どもたちみんなに打ち明けた。「児童合唱団というのは、もともと、たいてい寄宿学校で生活を一緒にして、声の勉強の前に、いろいろなルールやマナーを教えこまれて育つのです。それだからこそ、有名な児童合唱団は、長時間の飛行機に乗って、遠い国にも歌いに出かけることができるようになるのです。ここでは、ほんの短い練習を一緒にするだけですから、お家でもよく話し合っ、ステージ上ではキョロキョロ見まわさない、不意に身体具合がわるくなったり、ショックで気持ちがついてこれなくなったりしたときは、泣いたり、すわりこんだり、人を呼んだりする前に、サッとステージから抜けるように覚悟しておくこと。隣の人が一ひとりで出来ないような場合には、その後、自分も続けられなくなるかも知れないけれど、歌えなくなった子連れ出

して退場するように。こういうことは、練習するチャンスはないかもしれないけれど、いつも心に思っておくようにね。」

さて、どんなことになるのか。教会での場合、多少のことはもし起きて、神様も聴衆も善意にとってくださいるように思う。だから、参加する児童団員も前半だけで帰らず、《マタイ》全曲の最後まで、前列に腰掛けて聴くようにと義務づけた。そして実践的な多くのことを自ら学習し、3月21日の大ホール本番へと発展してゆくのである。1982年にも、本番の前に、南林間・高座教会の大きな会堂で、同じように特別演奏会をさせていただいて、みごとに成功した。児童合唱の成功は、多くの人に心を揺さぶるような大きな感動を与えてくれる。今回も、神様のあたたかいご加護を祈っている。基樹君も、最後までがんばれ！

## 受難曲と美術作品 最終回

白木 博也（画家、後援会員）

### 埋葬



ラファエルロ  
(Raffaello Sanzio,  
1483-1520)  
ローマ、  
ボルゲーゼ美術館

ゴルゴタの丘の麓にある小さな園に岩を掘らせ、新しく整えた墓にキリストを運び、納める。



カラヴァッジョ ▶  
(Caravaggio,  
Michelangelo Merisi da,  
1573-1610)  
ローマ、  
ヴァチカン美術館

## 合唱団員の皆さまへ

内山 亜希

年が明け、本番に向けて慌しくなっていました、いかがお過ごしでしょうか。

このたびは突然の入院により、合唱団の練習や世田谷中央教会での演奏会（3月3日）にご一緒することができなくなり、たいへん申し訳ありません。また緊急だったため大村先生にだけは連絡させていただきましたが、児童合唱の練習や伴奏代行の件でお手数をお掛けします方々に直接お話できませんこと、たいへん心苦しく思っております。

.....

児童合唱にしても全体合唱にしても、これから音楽と内容をつめていくという大事な時期に、こんなことになり、皆様にはたいへん申し訳ない気持ちで一杯です。また私自身も非常に残念でなりません。

一つだけ、差し出がましいとは思いつつ、皆様にお伝えできたかと思っていたことがあります。それは音色についてです。私自身がピアノを弾きながら音色を変えたいと思うところでは、息や体全体、細胞まで変えようとします。頭や心だけでは変わりがたいし、聴いている人には伝わらないと思っています。《マタイ》では、さまざま役柄や感情を歌い分けなければなりません。口から出る音そのものが何を伝えたいのか、嘆きなのか、怒りなのか、あざけりなのか、体から感じ、体全体を変えて出してみてください。言葉だけをただ口に出すだけでは、音色は変わらないと思います。

皆様も、時節柄、健康には十分ご注意ください、素晴らしい演奏会となるよう、心を一つに合わせてください。お願い申し上げます。そして、演奏会のご成功を心よりお祈り申し上げます。2007年1月5日  
(団伴奏ピアニスト、児童合唱指導)

内山さんは、この入院のままのご出産とのこと、退院は春爛漫のころか、ともお書きになっていらっしゃいます。無事のご出産とご本人の一日も早いご快復をお祈りし、また練習場への復帰を、首を長くしてお待ちしております。(大村)

### 新入団員の方々

12月、1月

<ソプラノ>

中村 桂子(インターネットで)

重藤 栄子(元団員)

<バス>

飯山 哲朗(元団員)

<児童>

岸田 瑞希(小1) 本間 遙(小5)

柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その2 >

## カンタータ第 123 番

《いとしインマヌエル わが魂の救い主よ》

この曲は、1725年1月6日、クリスマスの2週間のお祝いの最終日、顕現日(エピファニー、公現日ともいう)の礼拝で初めて演奏された。このエピファニーの語源はギリシア語で「輝き出る、顕現」という意味を持つ。それは、「真理(=イエス・キリスト)の光」が問題に満ちたこの世に輝き出たことを意味している。

この日に朗読された聖書の内容は、飼葉桶の幼子イエスを拜むために旅をしてきた「東方の博士たち」の物語である。しかし、この曲の歌詞はこの物語の内容に直接触れていない。なぜなのだろう・・・と疑問に思いながらこの曲を聴き続けていた。

そのうち、どうしても耳から離れなくなったのが、第3曲(テノール・アリア)の不思議な旋律である。その旋律は不安や苦しみ、十字架に向かうイエスの足を絡めとるような曲がりくねった雰囲気、その旋律をオーボエとファゴットとテノールが交差しながら展開する。その様は、あたかも迷いと悩みの多い複雑怪奇な人生の様でもある。しかし曲の途中、突然、光が差し込むようなアレグロのテンポに移り、穏やかなアダージョに流れ込んでいく。そこで歌われているのは 嵐のさなかに イエスは 救いと光を 上よりわれに賜う という歌詞である。なるほど。

つづく、第4曲(バス・レチタティーヴォ)の最後には 勝利はすでに われにあり 救いの主イエス 現るとある。そして、次の曲(第5曲、バス・アリア)で、どんな孤独であっても、いつも共にいてくださる(=インマヌエル)主イエスがわたしたちに現れたのだ、という喜びが深く静かに歌われる。

そうか、もしかしたら・・・と、この曲のメッセージが聞こえたような気がした。

砂漠や荒れ野を、ただ一つの大きな星をたよりに旅をした東方の学者たち。やっと幼子イエスに会い、喜びに満たされたものの、夢の告げで、帰路は危険に満ちていることを知る。来た道とは別の道に戻らなければならない。そんな不安な運命を背負った彼ら。しかし今度は本当の「真理の光=イエス・キリスト」が先立っている。不安ながらも安心できる。インマヌエルの光が照り輝いているから。

なるほど、エピファニーのためのカンタータであった。この曲を聴き終えたあとの安堵感は忘れられない。

(団員：バス)

CD [第14巻]に収録。A佐々木まり子, T佐伯雅巳, B渡邊明, 東京カンタータ室内管弦楽団, 指揮・橋本真行, 大村恵美子訳詞, 2005年録音(第98回定演)。演奏楽譜: 35